

人生、一炊の夢

齊藤 征雄

日の出とともに起きることを心掛けている。今の時節、五時が近づきそろそろ明るくなる頃うつらうつらしたまま時間を過ぎていると、また眠りに誘い込まれることもある。そんなときには決まって夢を見る。

バラ色の夢ではないが、これまでの人生の断章らしきことどもが出てくる。ただ、中はあまりはつきりしないことが多い。覚めてもまだ夜が明けきっていないから、そんなに長い時間の夢ではない。

なんでも人間は、長い時間夢の中にいたと思ってもその時間はほんの一瞬だという話を聞いたことがある。

中国唐の時代、蘆生ろせいという若者が報われない自分の人生を嘆き、一旗揚げようと邯鄲かんたんの町を目指していた。途中あるところで昼飯のために入った店で、呂翁りゆうおうという仙人に自分の夢を語ったところ、ある枕を貸してくれた。その枕で蘆生はうつらうつらと眠りに入った。

炉には粟粥が火にかけてあった。

夢の中で、蘆生はとんとん拍子に出世する。進士の試験にも合格し、美しい妻を娶って五人の子供にも恵まれて、地位も名誉も財力も手に入れ、遂には国の宰相にまで昇りつめる。そして波乱万丈の人生はいろいろな曲折を経て栄枯盛衰もあったが、五十年の歳月が流れ人生を終えた。

蘆生は、はつとして目が覚めた。見れば呂翁が傍らに座っていて、火にかけた粟粥は未だ炊き上がってもいなかった。

「一炊の夢だったのか」と言つと、呂翁は「人生とはこんなもんじゃよ」と応えた。

蘆生は、丁寧に礼を述べて、邯鄲へ行くのをやめて故郷へ帰って行った。

織田信長が好んだ幸若舞『敦盛』の一節、「人間五十年、下天の内をくらぶれば夢まぼろしの如くなり」ということにも通じる。下天は仏教でいう四天王天のことで、天上界では最下層の天であるが、それでも人間世界の五十年は下天では一昼夜に過ぎないという。信長は本能寺で、この一節を謡いつつ火焰の中へ入って行った。

さて、ようやく夜が明けた。起きることにするか。